哲學研究　第七十八號

行爲的主觀

西田幾多郎

主觀といふにも色々の種類があり、又種々の意味があると思ふ。色や形に對しては視覺作用があり、音に對しては聽覺作用があり、又此の如き所謂直覺作用と異なつて抽象的な意味や眞理の世界に對しては思惟作用がある。併し又すべて此等の知的作用と異なつた感情や意志の作用があると考へざるを得ない。而して普通に客觀界といへば、知識對象界に限ぎられて居るが、更にその根柢に情意の對象界があると考へることもできる。若し此等の作用が我の作用であるとすれば、我にも種々の我があると考へることができ、或は又一つの我が種々の作用を有つと考へることもできるであらう。無論我が作用を有つといふ樣な考は獨斷論的な考に過ぎない。眞の我といふのは、或一つの客觀界に對し、その視點であつて、又同時にその創造者である、卽ち創造的見者である。物體界といふ如きものが獨立に考へられる時、之を見る者は其外にあると考へられるが、現在の意識界に於ては、見る者は卽ち創造するも

のである。孰の一點を指して我といふことはできぬ、我は全體の進み行く終點であり、又その起點である。卽ち永久の現在である、此故に又孰の一點も我ならざるものはない、斯くして我は無限の發展であり、動的統一でなければならぬ。單に孰の一點も我ではなく、孰の一點も我ならざるはないと云ふだけでは靜的統一とも考へられるかも知れぬが、靜的統一では、孰の一點も我でないと云ひ得るでもあらうが、孰の一點も我であるとは云ひ得ないであらう。何となれば、我は、外にあるが故である。或は樹の一葉を指して樹であると云ふことはできぬ如く、我の一つの働きを指して我といふこともできぬと云ひ得るでもあらう。現在に於ての我の一つの働きは我の一つの働きであつて、我の全體ではないことは云ふまでもない、併し又單に全體がその中に潛在的といふのでもない。潛在的なるものは何時か發展し盡すと考へ得るが、我は發展し盡し得るものではない、無限の未來に於ても我は我を見ることはできぬ、見得たるものは我ではない。自我は到る處に顯現的である。眞の我は判斷の主語とすることもできなければ、又述語とすることもできぬ。ヘーゲルなどの考へた如く判斷は推論式に於て基礎附けられることによつてその客觀性を得、推論式によつて現はされ得る體系がその主體となるとすれば、眞の我は此の如き意味に於て判

斷の主體と考へることができる。而して推論式の基礎附は無限に深く入込み得る如く、我の奥底には無限に深いものがあるであらう。我々は推論式の無限の連續に於て始めて動的統一の立場に達し、此立場に於て基礎附けられると基礎附けるものとが對立し、無限に深く基礎附け行くのが主觀的作用である。主觀といふのはかゝる基礎附の立場である。我々は或色を赤とか青とかとして意識して時、我々は之を色の主體から基礎附けて居るのである、而してかゝる基礎附の外に色の意識はなく基礎附は一面に於て創造である。我々の知識は靜的統一によつて基礎附けられるのでなく、知識の客觀的基礎は何時でも動的統一にあるのである。種々の對象界に對して種々の主觀的作用があり、此等の作用が無限なる動的統一の形に於て一つの我に結合せられるのである。

普通には推論式と意志とは全然相離れたものと考へられて居るが、私は推論式の表が意志であり、意志の裏が推論式であると思ふ。意志は積極的方面であり、推論式は消極的方面とも云ひ得るであらう。ヘーゲルの考の如く推論式の基礎となるものは客觀的なものである。知識の根據として客觀的必然を以て我に臨むものは、カントの云ふ如き純我の統一によつて構成せられた客觀界でなければならぬ。我々

は此世界に於て我々の知識の無限なる根據を求めるのである。實在的なるものは理性的であり、理性的なるものは實在的であり、而もかゝる客觀界は我の所作であり、又その奥底である。我々が意志する時、目的を決定するに當つて既に知識が働くのであるが、目的から手段に移る時、之を決定するものは純なる客觀的知識でなければならぬ。我々は自然の法則に反して海邊に於ける一粒の砂をも動かすことはできないのである。我々の意志は小なる主觀的欲望から出立して大なる客觀的世界を之に從へようとする。是に於て我々の欲求は純なる知識の對象界と衝突せねばならぬ。併し純なる知識の對象界はカントの云ふ如く我々の心の奥に潜める純我の構成の世界に過ぎない。知識の爲に知識を求める純なる知的欲求も一種の意志であるとして見れば、我の撞着するものも亦我たるを免れない。知識の客觀的根據として我に臨むものも亦我に外ならない。我々が純なる知的我の立場に立つ時、知識の達すべからざる客觀的根據と見られるものは、却つて我の深い奥底であつて、知るといふことは此立場より意志することである。我々の知識は不完全であつて、推論式の形に於て何處までも、その基礎附を求めて行くといふのは、かゝる意志の要求に過ぎない。此立場から我々は何人も認めねばならない唯一の眞理を認め得るので

ある。各人の認識主觀は此立場によつて成立するのであり、認識作用はかゝる意志の發展の過程である。之に反したとひ盲目的衝動に基く意志であつても、其實現の過程は合理的でなければならぬ。心理學者が意志を表象の連續と考へるのも之に由るのである。唯目的其者は認識對象界に於て對象化することはできない。併し純なる知的作用に於ても認識主觀の奥に潜める知識の目的其者は對象化することはできぬ。主意主義の心理學が云ふ樣に、すべての精神作用は意志であつて、唯その目的の內容を異にすると考へることもできる。併し以上の如く云ふならばそれでは意志に於ては客觀を主觀に從へ、知識に於ては主觀が客觀に從ふ樣な兩者の區別は何處から起つて來るかとの疑問も起るであらう。私は我々が主觀的な目的を客觀的に實現するといふことは、一般的なるものが「唯一のもの」として自己自身を限定することであると思ふ。客觀的實在とはいつても「唯一なもの」でなければならぬ。何人にも共通で、幾度にても繰返し得るものは實在ではない。認識對象として射影せられたものは、すべて可能の世界に屬し、眞に唯一なる實在性を有するものは現在の認識作用あるのみである。意志は己自身に唯一して一般化することのできない實在性を有するのである。意志は意志自身の中にその實現を求めるのである。意志

が意志として發展することか「唯一なる實在」となることであつて、意志がその目的を客觀的に實現することである、所謂客觀界は意志によつて支持せられるのである。認識の目的は眞理にあることは云ふまでもないが、眞理を知るといふことは客觀的實在に到ることである。無論、認識とこふことは模寫說の考の樣に實在に合一することではなく、カント學徒の如くアプリオリより構成するのであると考へねばなるまい、否寧ろ動的一般者が自己自身を分化發展することであると考ふべきであらう。而して思惟が知覺と結合することによつて客觀的知識となるとカントが考へた如く、アプリオリのアプリオリの立場に於て思惟と純知覺とが結合することによつて、換言すれば、超越的意志の立場に於て、知識が特殊化せられることによつて、客觀的となると考へることができる。私は推論式の形に於て、知識を客觀的に基礎附けることは、唯超越的意志の立場に於て、可能であると信ずる。或は論理より數理に、數理より物理に、知識が綜合的となるとなるに從ひ、特殊化と共に客觀的となると考へ得るであらうが、生理學に於ての樣に自然科學的知識の中に目的觀が入つて來た場合、その知識は更に特殊化せられたと考へ得るも客觀的となつたとは云はれないかも知れない、後者は却つて主觀的とも考へられるであらう。何故に特殊化の方向に進む

と考へられる意志に近づくことが、却つて知識の客觀性を破ると考へられるであらうか。私は是に於て我々の意志の本質といふべきものを考へて見なければならぬ。我々の意志は元來單に主觀的なものではない。衝動に於ての樣に我々が自然によつて動かされると考へられた時、我々の欲求は客觀的自然に基礎を有することを意味する。加之、意志には實行の手段が備つて始めて眞の意志となる、可能なるものにして始めて意志の對象となるのである。若し實在は精神的であるとするならば、目的論的說明が眞實在の說明とも考へ得るであらう。客觀界は主觀によつて構成せられたものであり、與へられるものは求められたものであるとすれば、眞に與へられたものは意志の對象として與へられたものであり、眞の客觀界とは意志の對象界であると云ひ得るであらう。因果關係を論ずる科學に目的觀を入れるのは立場の混淆と排すべきであるが、目的觀は機械觀より一層高次的な見方であり、一層具體的な眞理とも云へる、此意味に於て客觀的と云ひ得るであらう。單に一般的なるものは具體的なるものではない。機械的因果關係は目的的因果の過程と考へることができる。無論眞理は意識一般の立場を失ふことはできないであらう、何處までも意識一般の立場に於て構成せられるものと考へなければならぬであらう。併し單に所

謂意識一般によつて與へられるものは無內容なる知識の形式のみである。知識はその內容を得て具體的となることによつて、一般性を減ずるかも知らぬが、一般妥當性を失はない。何となれば、知覺と思惟とを結合する意志の立場は、意識一般を超越して之を中に含むが故である。數理のアプリオリによつて數の世界が構成せられる。或一つの數學的眞理は數理も世界に於て動かすことのできない眞理として唯一性を有たねばならぬ。而して此の如く或眞理が數理の世界に於て唯一的であると云ふこと自身が、多くの主觀に對して一般的妥當性を有するといふことゝなる。我々の自己が數理的思惟の立場に立つ場合、或一つの數學的眞理はそれが唯一の事實であると共に一般妥當的である。恰も具體的自己の立場に於て、歷史的眞理が唯一なると共に一般妥當性的なると同樣である。唯數理のアプリオリは自己の全體でないから、自己は更に分化發展し得る。而して斯く分化したる個性的自己に對しては、數理は單に一般的なる眞理となる。我々が推論式の形に於て知識を基礎附ける時、それが數學的知識であるならば、數理のアプリオリに依らねばならぬ。此時、數理のアプリオリは具體的一般者として無限なる數理の根柢となる。之によつて眞理の唯一性が立せられるのである。物理的知識に於ては、そのアプリオリは一層具

體的とならねばならぬ。作用の立場に於て、アプリオリが具體的となればなる程、知識は具體的となる。無論、物理のアプリオリが數理のそれよりも一層具體的なるが故に、數理が物理によつて基礎附けられるのではない。併し我々が知るといふことは、抽象的より具體的に至るといふことであるならば、物理的知識は數理的知識により一層知識の目的に合つたものでなければならぬ。一つのアプリオリの中に於ても眞理を決するには、その目的によらねばならぬ。目的に合つたものが具體的にして唯一なるものとなるのである。眞理の唯一性を與へるものは此の目的的統一である。我々の意志といはれるものも單に主觀的ではない、私の意志は私の見る世界の中心である私の見る世界は私の意志によつて支へられて居る。動物に取つては此世界は單なる飢渴の世であり、飢渴を滿足せしめるものが唯一の客觀的眞實在である。知識はすべてそれ自身に何等の價値なき手段にすぎない、動物の哲學は實用主義たらざるを得ない。我々が知識に於て眞實在を認めると考へざるを得ざるのは、超越的意志が我々の自己の根柢を成すが故である。知識的當爲の根柢に道德的當爲がある。眞を含まない善はあり得ない、善は眞を要求し來るのである。我々の意志は何時でも現實から出でゝ現實に還る、此處に意志の唯一性がある。眞理の唯

一性も之に外ならない。知るといふ意志に始まつて、知るといふ意志に終る、知らんと意志する時知らるべきものが含まれて居る。我々が推論式に於て、外に無限に客觀的基礎を求めて行くといふことは、內に無限に自己に還ることである。私の世界の進み行く先は私自身の中にあるのである。無限なる知識の體系を統一し決定するものは我の深い奥底にある。理性は意志發展の過程に外ならない、卽ち自己自身の純化作用に過ぎない。

我々の理性の要求から推論式の形に於て無限に知識の基礎附を求めて行くことは、具體的作用としては意志である。理性は超越的意志の一面と考へることができる。カントは Transc. Dialektik. の始に於て理性の原理として zu dem bedingten Erkenntnisse des Verstandes das Unbedingte zu finden womit die Einheit desselben vollendet wird と云つて居るが、知識に絶對的根據を與へるものは創造的意志でなければならぬ。知識の立場から見れば、意志其者の內容は達すべからざる無限の果と考へられるであらう。併し自己が自己を省みるといふ自覺に於て、かゝる無限の系列を積極的に知り得る如く、我々は我々が意志する、我々が行爲するといふ直接の意識に於て、對象化することのできない作用自身の意識することができる。而して知識の客觀性は

此の如き意志の意識、行爲の意識の上に立せられるのである、卽ち認識主觀は行爲的主觀によつて立つのである。私は今朝、覺めて此机の前に座する私は直に此の机は昨日の机であると認識する、心理學者は無造作に之を記憶によるといふ。併し記憶といふことは如所にして可能なるか。過去の表象は過去の表象として消去つたものならば、如何にしてそれが現實の表象と比較せられ、その異同が判斷せられるのであるか。若し之を腦細胞の作用に歸するならば、間接のものを以て直接のものを證明することゝなり、二重の困難に陷るであらう。昨日の意識と今日の意識とを直接に結合するには私が嘗て論じた如く超時間的なる意識統一によると考へねばならぬ、超時間的自己の立場に於て始めて可能であるのである。時間といふのは却つてかゝる統一の形式と考へられるのである。併し單なる意識統一といふ立場に立つならば、我々は一歩も自己の意識外に踏み出すことはできぬ。昨日の机といふのは昨日の私の意識內容であり、今日の机といふのは今日の意識內容であり、此二つものが、超時間的自己の立場に於て統一せられ得るものとしても、それは意識內容としての同一性であり、不變性たるに過ぎぬ。單に意識統一といふ立場からしては、我々は觀念主義の外に出づることはできないのである。併し我々は此机が意識內容とし

ての同一性を有し、不變性を有すると考へるのみならず、昨夜私の眠つて居た間にも、此机は繼續し存在し居たと信ずる。此机上の時計は私の眠れる間にも、休むことなく進んで、我々は之によつて、我々の眠れる時間をも計り得ると信ずる。我々は何によつて、斯く信ぜざるを得ないのであるか。かゝる知識に客觀性を與へるものは單に意識一般といふ如き知的統一でならくして、意志の統一でなければならぬ。意志といふのは意識と無意識との統一である。我々は行爲の立場に於て過去と未來とを含み、物と心とを統一して居るのである。天上の星に對して我々は所有の欲求を起さない如く、可能の意識なくして欲求の念は起らない。或は快不快の感情の對立より自ら欲求の念が生ずると考へられるでもあらうが、現在の不快に對して過去の快を想起し、心内に感情の對立が成するといふことゝ、意志とか行爲とかいふことはその本質を異にすると考へる。私はそこにアプリオリの相違があると考へざるを得ない。卑近に云へば、運動の感覺の如きものが加はらねばならぬと云ひ得るかも知れぬが、深く考へれば、そこに主觀にして客觀を包む超越的意志のアプリオリが加り來ると考へねばならぬ。感覺より思惟が出ぬ樣に、單なる感情より意志は出て來ない。却つて感情や知識よりも意志が一層根本的であると考へることができる。

知覺も概念も實用的意味を含むといふ實用主義の議論も一面の眞理を含んで居るのである。而して空間といふのは我々の運動可能の範圍を示すものであらう。私は此机が私の意識せない時でも存在し居るといふのは、私は之に觸れゝば觸れ得る可能性があるといふことの意味に外ならない。而して又可能といふことは同時存在を意味し、物體の世界を意味するのである。所謂心外に於ける物體の世界は、單なる知的立場に於て成立するのではない、寧ろ意志の立場に於て成立すると考へねばならぬ。純粹統覺は純粹意志の一面と解すべきであらう。私をして此机か直に昨日の机であると知らしめるものは私の意志の直覺に基づくのである。純粹意志を離れて純粹統覺はない、私は此机を此机と認めるのも之によるのである。我々の經驗界を構成する純粹統覺は單に一般的な論理意識であつてはならぬ、現在の經驗の中にあつて、之を構成するものでなければならぬ而して現實に於て經驗の內容と形式と結合するには意志の形に於てゞなければならぬ。經驗內容と論理とは通常互に無關係と考へられる經驗內容が非合理的、偶然的と考へられるのである。例へば早い振動が赤であつて、遲いのが青色であつても矛盾ではない、唯我々は經驗的知識を動かすべからざる眞理と信ずるのは現實の事實感によるのである。而して事實

的知識を構成するものは作用の作用たる意志のアプリオリでなければならぬ。無論右に云つた如く現實と可能との統一たる意志の立場に於て、意識外に於ける物の存在が認められ、自然科學的知識も之によつて立せられると云ふ時、種々の疑問が起るであらう。我々は如何にして意識外の物を知り得るか、我々の意識は眠れる間も意識しつゝあつたのであるか。此等の疑問は不可解の樣に思はれるが、我々が意志する時、意志することを意識し居るのである。物を知る場合、我々は知るものと知られるものと別であると考へねばならぬが、我が我を知る時、知るものと知られるものと一つであると考へねばならぬ。我が我を知ると云ふ意識は何時でも「時」を超越して居る。或はかゝる意識は單なる假定に過ぎないと云ふでもあらう。併しすべての知識は此意識の上に立つのである。若し之を假定といふならば自同律の如きも假定たるを免れない。我々の眠れる間にも意識があつたとは言ひ難い。併し意識現象外の物體界は單なる可能の世界、抽象の世界に過ぎない。我々の意志は意志と直に結合するのである。意志は單に時間の形式によつて構成せられた出來事ではない、我々はいつも我々の意志完成の過程の中にあるのである、藝術的創作の如きものであると思ふ。行爲は單なる時間上の出來事ではなくして意味の完成でなけれ

ばならぬ。その一面に時間を離れた意味の世界がある、所謂物質界も此處にあるのである。藝術的創造作用では、かゝる意味の世界は藝術的理想の世界と考へられるが、行爲に於てはそれがその人の人格的內容であり、世界史に於ては神の人格的內容となる。アウグスチヌスが神の創造以前に「時」はない「時」も神の創造したものであると云つた如く、意志を束縛する「時」はない藝術的創作に對して「時」はその意義を失ふ如く、意志は「時」に對して自由である。此故に知識の立場に於ては、我々は世界は何の方向に進むかを知り得ない、唯意志の深い奧底から導かれるのみである。我々は普通に可能の世界たる物質界を實在となし、精神界を虛幻と考へるから「時」の範疇を超越するといふことが不可解の樣に思はれるのであるが、物質の世界を可能の世界、抽象の世界と見る時、世界全體が一つの藝術的創作と見做され、私の所謂昨日の意識と今日の意識との結合、意志と意志との直接の接觸が「永久の今」の立場を理解し得ると思ふと思ふのである。

若し人生に眞に神祕なるものがあるとすれば、現在に於ける自己の行爲より神祕なるものはない。行かんと要せば行き、坐せんと要せば坐す、此自由なる行爲の立場に於て、物と心との世界を統一し此兩界の上に坐して居る。現實にして而も縱に無

限の過去と未來とを、横に無限の空間とを、内に包むが故に、我々は現實の意識に於て意識以外に無限なる世界の存在を確信し得るのである。所謂知識の根元として客觀的必然を以て我に臨むものも、此立場に依つて立つ主客合一の世界に過ぎない。カントの物自體の世界も此處に求むべきであらう。而してかくの如き行爲の世界は所謂知識の世界を内に包むと共に、己自身の積極的世界を有つて居る。此世界は行爲が行爲自身を目的とすることによつて現れ來たるのである、卽ち行爲が行爲自身に還ることによつて現れ來る具體的世界である。藝術の世界、道德の世界は此の如き純なる行爲の立場に立つことによつてのみ現れ來る創造的自己の世界と考ふべきであらう。故に藝術家は創作に於て、道德家は行爲に於て、唯眞摯に行爲することによつて、新なる藝術の世界を見、新なる道德の世界に進み得るのである。

此論文に於て意志と推論式との關係を論ずる所、特に意に滿たないものが多い。他日又論じて見たいと思ふ。